

SBU—小代ゼミ交流会の歩み — 3年間の発展をたどって —

小代有希子



毎年6月 日本大学国際関係学部の姉妹校 米国ストーニーブルック大学（SBU）から学生20名がキャンパスにやって来る。1ヶ月間ホームステイしながら、日本語と日本文化を学び、箱根、東京、伊豆各地の訪問を行なうプログラムが発足してはや3年。初年から、SBUの引率教官 長瀬絵葉先生のご理解と協力をいただき、私のゼミで SBUの学生たちと交流会を主催することが慣例となった。「交流を行なってきた」というより「そうする努力をしてきた」と言うほうが正しいだろう。ゼミ生が、私のアドバイスやヒントなど一切受けず、アメリカの大学生と「交流」とはどのようなことを ゼロのところから考え、実行してみるという試行錯誤を繰り返してきたのだ。

企画は毎年少しづつ変化し進化しているように見える。今年は3期生が企画実行し、1期生2期生有志がそれを手伝う形になった。この3年間ゼミ生がどのように「交流会」の意義を考え実行していったか、その小史を紹介したい。

始まりは はなはだ不純な動機からだった。2006年6月、1期生の1人が所属していたサークルに、黒のサングラスにピンクのショートパンツをはいたSBUの韓国系の女子学生が ふらっと遊びに行き、彼と言葉をかわしたらしい。なんでもその彼女は、見たこともないような知的美人だったそうで、舞い上がった彼は考えた — 「ぜひこのゼミで SBU交流会をやろう」。

他の1期生は真相を知らぬまま、彼の案をあっさり受け入れて、いそいそと交流会の準備を始めた。しかし全くアイデアが浮かばない。何をやれば相手は楽しいか。そもそも言葉の壁がある、第一話せたとしても何を話せばよいのか。「歓迎」「交流」って何のことだ——考えれば考えるほど焦った。結局アメリカ人学生がホームステイ先でもおおよそ食べる機会がないであろう駄菓子でおもてなしを、という無難そうなテーマを設定した。交流会当日は、ゼミ生が、男女ものの浴衣や、秋葉原のメイド喫茶のコスチュームなどを持ち込んで、SBUの学生に着せたところ非常に喜ばれた。なんとはなしに、ではあるが楽しく過ごすことができた。たどたどしい英語のコミュニケーションに、ゼミ生の個性を見出してくれた理解あるSBUの学生もいた。彼はその後JETプログラムで日本に戻ってきて、中高生に英語を教えている。



浴衣の着付けは、ゼミ生が担当



アキバ系はアメリカでも人気

翌年2007年6月、第2回めの交流会は、長瀬先生のアドバイスもあり、アクティビティーの充実を図り、『日本のこどものあそび』を教える場にした。100円ショップで、けんだま、紙相撲、おはじき、福笑い、あやとり、カルタ

などのゲームを買い揃え、日本のわらべ歌を英語に訳し、さらに外に出て「だるまさんがころんだ」の遊び方を教える、といった段取りを整えた。前年度のSBUの学生たちは、こちらが何をやっても喜んでくれる気の良い学生たちだったが、今回は様子が違った。ゼミ生が用意した遊びは眼中になく、室内でフリスビーやキャッチボールをはじめたり、一段落したら出そうと準備していたお菓子や飲み物を探し出してきて、勝手にスナックタイムを始めてしまう学生もでてくる始末。彼らにしてみれば、アメリカのキャンパスで週末の夜に集まって飲んで騒ぐようなノリをそのまま三島で再現したのだろうが、こちらのゼミ生はホストとしてどう対応したものか、当惑するままだっただらしい。

暗くなった頃 外に出て「だるまさんがころんだ」を何度かやったが、こちらの教え方がうまくいかず、早々に飽きがきた彼らは「アメリカ風の鬼ごっこの方がおもしろい、それをやろう」と提案し、再び主導権は彼らに移ってしまった。暗闇の芝生の上を総計40人ほどの日米男女学生がヤケクソ気味に全力疾走した。最後は、2期生の案で用意したおみやげ（100円ショップで買った和風手ぬぐい）をSBUの学生1人1人に配り、交流会は終わった。「遊んでくれてありがとう」というメッセージをこめたプレゼントか。でもそれはおかしくないか。



だるまさんがころんだ



鬼ごっこの思い出は、どんな味？

さてこの交流会のあった夜、鬼ごっこでアドレナリンが上がってしまった日米両方の学生たちの一部が、ちょっとした「事件」を起こす。この件はいつか時効が過ぎたら紹介することにするが、巻き込まれた（巻き込んだ？）ゼミ生は落ち込んだ。同じころ、アメリカの別の姉妹校から三島キャンパスに来ていた交換留学生に、この事件の顛末記を話したところ、1期生のゼミにやって来て、彼らを応援してくれた。「日本人は、アメリカ人を喜ばせようと一所懸命になりすぎる」「日本人は自分たちのために何でもする、と自惚れるアメリカ人もいっぱいいるんだから、よく知らないアメリカ人と付き合うときは、しっかりと手綱を引き締めて 気を許しちゃいけない」など等、なかなか普通では語ってくれないようなことをずばりと指摘してくれた。

確かに交流する相手というのは、おつきあいの方法を心得た社交術にたけている人たちばかりでない。彼が教えてくれた、アメリカのごく普通の男同士のつきあいのかけひきの難しさは、すばらしいレッスンだった、と思う。「日米の対等で円滑な、腹を割ったつきあい」の難しさをゼミ生は実感しただろう。ちなみにこのときの体験が、この年の富桜祭でのゼミ企画『日米交流、政府の仕事、私たちの仕事』というパネル・ディスカッションのテーマに発展していく。

そして2008年6月、交流会は第3回めを迎えた。ゼミ3期生が企画実施を担当した。リーダー役のゼミ生を中心にゼミ全体がよくまとまった。心強い存在として、中国、韓国、フィリピンからの留学生が3名おり 普段の授業でも常に「外人の視点」を説明してくれる。ゼミ全体の語学力も高い。これまでの反省点を学んだ上で、企画を一新させた。日本文化の説明をよりにねいに言い、一緒に体験してもらおう、しかもアメリカ人学生を飽きさせないため、できばきと進行をすすめていく、という基本方針を立てた。

用意したプログラムは、腕に覚えのあるゼミ生による空手と日本武道のデモンストラーション、カルタ遊びの講習と実践、そして「三島サンバ」を学んでもらい一緒に踊ること。「三島サンバ」は、ゼミ恒例「山中城祭り」で知った地元名物の踊りだが、本格的な雰囲気を出すために三島市観光協会と学生課からハッピーと衣装を借りてきた。会場となるスカイ・ラウンジには、カルタ遊び、三島サンバ、小代ゼミの活動、などを英語で説明する手作りポスターも用意した。

これまでの交流会の一番のネックは英語でのコミュニケーションが弱かったことだ。今回は、初めと最後のあいさつ、武道の型とカルタ遊びの説明、三島サンバの振り付けなどなど、ありとあらゆる説明を英語で行なうことにした。当日は、これまでの交流会でガンとして英語で話すことを拒否してきたゼミ1期生が、英語のスピーチを自分で準備して、閉会の辞を述べた。もっとも彼は、昨年サイパン研修でも、北マリアナ大学の学生30人ほどを前にして、堂々と英語であいさつをしているのだ。要は、ほんの少しの度胸と、やる気だ。



はじまりのあいさつ



SBU 側にも柔道、テコンドー経験者がいましたが



すぐに覚えて盛り上がったカルタ大会



韓国留学生として日米交流に貢献しています！

この交流会に手ごたえを得て、今年もう1つ初めての試みとして SBU の学生とゼミ生とで討論会を行うことにした。『日本とアメリカについて、どんなことでもいいから思ったこと、気がついたことを語りあおう』というテーマを提示したところ、SBUからは有志4名が参加、ゼミからは1期、2期、3期生12名ほどが集まり、2時間近く意見を交わすことになった。英語で話せるところは英語で、難しいところは私が通訳をしたので、ゼミ生はそれぞれの英語力に合わせて参加できたと思う。

SBU の学生たちから出た一番大きな質問は、「本当の日本はどこにある？」ということだった。「世界中どこに行っても McDonald's がある。ここ三島にも」という ややお決まりの「世界のアメリカ化現象を嘆く」ことから始まり、「あなたたちはそれで寂しくないのですか？」という厳しい問いかけが向けられる。「僕はアメリカで、禅を学び、三島由紀夫を読み、つらい時にはドラゴンボールZに力をもらい、空手を学び、日本を理解しようとしてきたのに、三島に来てみたらそんな日本はなかった」、「食事にマヨネーズを使いすぎる」、「アメリカのものばかりであふれている。あなたの筆箱のマンガはスヌーピー、あなたのハンカチはセサミストリート、そのバッグに描いてあるのはスポンジ・ボブ、あなたの着てるのはラルフ・ローレン、あなたのTシャツには アメリカのカルト的パンクバンドの名前が書いてある」などなどの一斉攻撃が4人から発せられ ゼミ生はタジタジになった。もっとも彼らの中の1人は、「すみません、僕らアメリカ人ってこういう風に挑発的になって討論を面白くしようとするんです。だからみんなも、僕らを怒らせるようなことを、どんどん言ってください」と説明してくれた。

気を取り直したゼミ生が徐々に反撃にでた。「日本は明治時代以来、西欧化をモットーにしてやってきたし、日本風に固執していたら西欧の植民地にされてしまっただろう。第一、戦争に負けて『アメリカ化』を押し付けられたのも

事実なのだから、こういう日本を ありのままの日本として受け入れるべきです。」「東京の渋谷とかに行ったら、もっと狂ったようなファッションがありますよ。 だけどそれも日本の真実なんです。 着物を着た人がお茶をたてて、寺や神社にいて、という日本を見たければ、京都観光をすればよいでしょう」「アメリカ人が18世紀の生活様式に戻れないように 日本人だって江戸時代には戻れないです」などなど。 ゼミ生の主張は「あなたの見ているものが ありのままの日本なのだから、それを事実として受け入れてほしい」ということだったのだ。

その他ゼミ生からのユニークなコメントとしては、「マクドナルドは確かに日本にあります、それをアメリカのものと意識しているわけではないです。 ただの安いハンバーガー・チェーンであって、別に星条旗がはためているわけではないです」「それと同じで、スヌーピー、スポンジ・ボブとか、アメリカを嫌いでも キャラクターがかわいければ使ってるだけですよ」といったものがあった。これには SBU側が直ちに反論してきた。「そうやって無意識にアメリカの文化帝国主義を受け入れているのが一番危険なんですよ」。 しかし、昨年インド留学してきたゼミ生が ポツンとこう答えた。「日本はアメリカ化しすぎて、と言うけれど、私 アメリカ嫌いだし、アメリカに興味ないです。アメリカ人が思うほどに日本はアメリカに夢中というわけでもないんです。。。」。



討論会に来てくれた有志4人と、お別れ会にて

昨年やはりアメリカに留学したゼミ生も、貴重なコメントをした。「日本がアメリカ化しすぎているかどうか論じるのに英語だけを使って、しかも私たちも英語で対応するのが当然と思っているというのは、ヘンでしょう。 私がアメリカに留学していたとき、アメリカに対して疑問があって、私がぎこちない英語で不自由しながらアメリカのここが変だ、など言っても誰も聞いてくれませんでした。アメリカ人は自分が主張するばかりで外人の言うことは聞かないんです。 日本人は日本文化を守るべきだ、というなら日本語で討論しませんか。」

これにはSBUの学生たち、一瞬たじろいだ。しかし彼らは即座に立ち直って「いや、僕たちはとてもでないが日本語ではこんな討論はできない」「あなたたちは中学校から6年以上英語を学んでいるんでしょう」「英語は国際共通語ですよ」と反論した。こんどは、上のコメントをしたゼミ生が「どうせ理解してくれない、言わなければよかった」といった表情になってしまった。考えてみれば「国際共通語」として日本人が英語をしゃべることは当然とし、一方で日本人が固有の文化と生活様式をかたくなに維持していくべきであると期待するアメリカ人、というのなかなか注文が難しい人たちである。

討論は、こうして平行線をたどった感じになった。しかし終始緊張に満ちていたわけでもない。SBUの学生がぽつんと質問した。「マンハッタンに住んでる日本人の女の子を一度デートに誘ったのですが、その後電話しても返事がかえってこない。日本の女の子っていうのはどれだけ照れ屋なんですかね」。わがゼミの女子生徒たち、間髪を入れず「それは彼女があなたに興味ないということですよ」とぼつさり斬り捨てた。アメリカ側が日本側の言い分に「ごもっとも」とうなだれた瞬間だった。

討論が終わって教室を出た途端、双方みなリラックスして、にこにこ顔になり、校舎の外へ出ると、もっとくつろいだ楽しいおしゃべりが始まった。ゼミ生はまだまだ言いたいこともあったのにそれをうまく表現できない、しかも質問をぶつけられても、なかなかすぐに答えとなるような考えをまとめられない、という壁を実感した。

「何をどうしたらよいのか全くわからない」というゼロのところから始まった交流会だが、3回目でこのような討論会を行なえるまでに成長を遂げた。日本とアメリカの付き合いというのも実に難しいものを抱えている。これまでの試行錯誤と今回のごたえをもとに、ゼミ生は今後の交流会・討論会をよりよいものにしていくだろう。21世紀の日米関係のあり方について考え、国際社会と自分を見る目を養っていくであろうゼミ生の様子を、今後も見守っていきたい。

最後にもう一度、毎年SBU交流会にご理解を示してくださる、長瀬絵葉先生に、ゼミ生一同とともに、心からお礼を申し上げたい。今後も末永いおつきあいが続くことを祈りたい。(2008.08.11 記す)



三島サンバを SBU の名物にしてください



また来年、一緒に楽しみましょう